

環境教育と造形ワークショップの新たな関わりについて

A study of new relation of environmental study and an art activity workshop.

山 田 綾
Aya YAMADA

Abstract

The Relation of environmental education and art activities is not especially novel. An environmental education has been performed at the beginning with subjects, such as social studies and science, in the pollution problem of the 1970s in school education. When it looks down at the thing of the future the inside where we make a living, and from now on, today's environmental problem is very important thing what cannot be disregarded. As one of the measures to this, the art activities on the theme of environment can be considered. That is, this study aims to consider the difference between environmental education and an art activity workshop performed how not a thing but "environment" with emphasis on education are positioned in an art activity workshop, and so far about this again.

Keywords：造形ワークショップ、環境教育、コミュニケーション、アートプロジェクト

I．はじめに

環境教育と造形活動の関わりは特に目新しいものではない。環境教育は学校教育において、1970年代の公害問題を発端に社会科や理科といった科目で行われてきた。その後も、それらの科目を中心にしながら、学校によっては学科や授業の枠組みを越えた横断的な試みがされている。さらに、2002年度より新学習指導要領に基づき、「総合的な学習の時間」が設けられ、「ゆとり」のなかで「生きる力」をはぐくむことを重視することが提言されており、そこで学ぶテーマとして、国際理解・外国語会話、情報、環境、福祉・健康などといった現代的な課題が挙げられている。ここで改めて環境が挙げられているように、このことは重要なキーワードであることがわかる。それは、私たちが生きていく中で、そして今後将来のことを俯瞰すると、今日の環境問題は無視できないものとなっているからである。このことに対する取り組みの一つとして、環境をテーマにした造形活動が考えられる。この論考では、環境教育と造形活動の関わりについて、学校教育における環境教育に焦点を当てるのではなく、美術館や地域などで行われる造形ワークショップを通じての考察を行いたい。つまり、教育に重点を置いたものではなく、“環境”ということ、造形ワークショップの中でどのように位置づけているのか、またこのことについて、これまで行われてきた環境教育と造形ワークショップの違いについて考察していきたい。

は改めて述べるまでもない。例えば、環境問題についての啓蒙の意味を持ったポスターの制作、自分の町をテーマにした絵画の制作や、廃材を利用した造形活動などが挙げられる。例えば、岐阜市島保育所の場合、家から出た牛乳パックや発泡トレイなどを保育所に持参させることを日課としている。（図1）それらから例えば牛乳パックで家を作り、またジュースの空きパックで指人形を制作して、“ごっこ遊び”をする。そういったアイディアはすべて保育士によるものであるが、「捨ててしまえばゴミになってしまうけれど、ちょっと手を加えるだけで、こんなにもおもしろいものになったよ」と常に子供たちに伝えているという。普段はゴミとなってしまうものが、創造力や制作することによって作品として生まれ変わることで、そしてそれを用いての遊び、経験を通して、こどもなりに新たな視点が広がる



図1 廃材を利用したクリスマスツリー
（岐阜市島保育所）

II．環境教育と造形活動

これまでも環境教育の中で、造形活動が行われてきたこと

のではないかと考えられる。

このように、保育所や小学校などで行われる造形活動を通して環境教育では、身近な素材、取り組みやすい事柄を通して習得していくことが多い。特に造形活動では、実際に手足を動かし、また他者とのコミュニケーションを含んでおり、自己で完結することがないので、環境という常に変容していく問題に対して、柔軟に対応することができるとも考えられる。

Ⅲ．環境教育と造形ワークショップ

1．環境と造形活動

では、環境と造形活動の関わりとはどんなものなのか。

現代美術においても、環境をモチーフに制作活動を行う作家がいる。例えば、アースワークが挙げられるが、アースワークの作家たちは、環境そのものを作品に取り込んだり、その場の環境でしか成立し得ない作品を制作した。(図2) また、その後の展開として、環境問題にコミットし、土地再生を提案する流れがあり、そのためにアートを取り入れた。しかし、制作素材として自然環境を取り込むものの、当時主流であった経済性や利便性とはかけ離れ、また現在のような環境に対する意識をもちながらの動きではなかった。



図2 ロバート・スミッソン《スパイラル・ジェティ》1970

その一方で、自分たちに身近な環境を制作に取り込み表現する作家は、最近多いように思われる。この論考では藤浩志の《ビニール・プラスチック・コネクション》と石松丈佳の《環境感知器》を取り上げたい。この2作家を挙げる理由は、今挙げたように環境を造形のなかに表現する試みを行っている点、また、今回対象としている子どもが環境に対して、積極的に関わる造形ワークショップを行っているからである。

(1) 藤浩志《ビニール・プラスチック・コネクション》

藤浩志の《ビニール・プラスチック・コネクション》(以下、VPC)は1999年箱根彫刻の森美術館で開催された「ビニール・プラスチック・コネクション」にはじまる。そこでは、ペットボトルで作ったテーブルやカヌー、ビデオテープを細かく裂いて編んだショッピングバック、ポリ袋製のコートなどが展示さ

れた。このように、作品は日常生活から生まれるゴミやあふれるように存在するペットボトルなどによって制作される。また、家に余ったおもちゃやぬいぐるみなどを(物々)交換する《かえっこショップ》(図3)、それらを用いて劇を行う二次的なプログラム《ぬいぐるみシアター》など様々なプログラムが存在しており、それら全体をVPCと呼んでいる。VPCは藤が事前に提案するものは、イメージだけであり、その場に関わる人たちによって、様々な形に変容する。



図3 かえっこショップの様子
(名古屋 アートポート 2001年)

VPCでは、非常に身近なものを用いて、プログラムが進行していく。最終的にはゴミになってしまうものを、造形ワークショップを通して作品へと変化させていくのである。例えば、ペットボトルを集積させて作った椅子やテーブルなどのスツールは、1つ1つがペットボトルであるものの、その大量の集合体によってクリアに輝くものとなっている。また、想像以上の強度と機能を持っており、それらを日常的に使用できることが、普段使っているテーブルなどとは異なるものとして、日常とのズレを感じさせる。

VPCの場合、多くの人が簡単に関わることでできるプログラムとなっている。誰もが生活の中から生み出しているゴミを新たな形態に変換する行為を、もちろん一人でやることも可能であるし、また多くの人々が集まることで異なったものへとさせている。さらに、廃材を用いてさまざまなものを制作するが、制作物は日常の中でなんらかの機能を持つものが多く、制作し、実際に使うこと、またコレクションとして展示することを基本としている。制作や実際使用することで、それが単なる工作ではなく、素材にまつわる多くの問題について考え直すことが可能となっている。(図4)

ここで、VPCと環境教育との違いについて考えてみたい。素材はペットボトルや菓子袋などといったようないわゆるゴミであり、それらを用いて造形活動を行うという点で、両者は共通している。様々なゴミを組み合わせることで、新たな形態を生み出すのである。



図4 《ピニプラ・アートカフェ》の様子
(名古屋 アートポート2001 2001年)

一方で、それらの違いから導かれるVPCの特徴とは、以下の3点である。

- ①藤の提唱するVPCというOS、プログラムを受け、その場において適当なやり方で実施すること
- ②プログラムが発展性をもつ
- ③継続性をもつ、循環する

これら3点が交わりあうことで、VPCが成り立っていると言えよう。2000年に岐阜県上石津町で行われたワークショップでは、家から排出された菓子袋やビデオテープなどを用いて、バッグや帽子などを制作し、さらに子どもたちの企画によるファッションショーも開催された。(図5)また、ゴミを用いた制作は、工房をオープンさせることで、誰もがそこで体験できるものとなった。今日でも、上石津町ではVPCが地元の人々によって継続されている。このように、発展性、継続性といったことは、完成することを目指すのではなく、関わる人々のアイディアによって常に変化し続けるのであり、無意識かもしれないが環境との接点を持ち続けることができると言えよう。



図5 《ピニプラショー》の様子
(岐阜、上石津町 2000年)

(2) 石松丈佳《環境感知器》

石松丈佳の制作する《環境感知器》は、身近に存在する環境を知覚化する作品である。人々の呼吸、作品のそばを通り過ぎなどの日常行為から生まれた動きを、《環境感知器》が察知し、非常にささやかにふわふわと動き続け、変化する。石松の制作から、自身の環境に対する意識が少し変化するように感じられるのである。作家本人も述べているように、劇的な変化で

はない、むしろ普段は気づかない、見落としてしまうようなアナログな変化を取り込む表現を行っている。

このように、石松は《環境感知器》という非常に身近に感じられる制作から、ワークショップでも簡素なモチーフを提案し、参加者を楽しませている。今年6月に行ったワークショップ「環境感知器入門」では、湿度計と簡単な環境感知器の制作を行った。アナログな湿度計「湿度計ダゾウ」は、形態を象に見立て、セロハンとアルミホイルで作った長い鼻の部分湿度計として、その伸び縮みの様子を楽しむものであった。また、もうひとつはささやかな風で揺れる鳥を模した環境感知器であった。(図6)今回は、ワークショップの参加者が、自ら形作りから行うのではなく、あらかじめ与えられたモチーフを組み立てることで、環境を感じ取るという傾向が強く、造形と言うよりは環境そのものが与える変化の様子を驚き、楽しむものとなった。湿度計においては、数値による情報は実体験として私たちに何を教えてくれるのかと考えると、実感の伴わないことがあるが、象の鼻の伸び縮みは目で見ることで、湿度の高低を訴えかけてくれる。このように日頃の生活で見過ごしてしまう緩やかな風や、湿度計では例えば70%というように、数値で知ること視覚的に知ることができた。

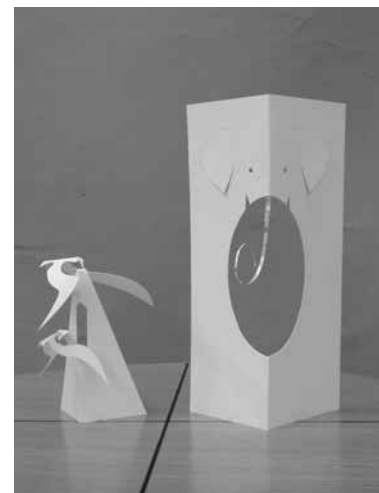


図6 うーかんでるトリ(左)と湿度計ダゾウ(右)

また、6月に続いて、7月にも大学主催の公開講座の中で、異なった環境感知器を制作するワークショップ「牛乳魚プロジェクト」を行ったが、今回は特に、参加者が思い思いの造形を生み出し、非常に興味深いものとなった。(図7、8)素材は今回もとても身近な牛乳パックで、それを少しつぶした形が魚のように見えたことから、このワークショップは始まった。形態が誰にでも分かりやすく、また、簡素なものであったため、より個性が出やすくなったようである。参加者の子供の一は、牛乳魚本体を大きな魚と見立て、その頭の先から小魚を吊し、風で動くことで大きな魚が小魚を追うといったものを制作した。子供自身は、無意識かもしれないが、ただ動くだけでなく、



図7、8 夏期公開講座「環境と造形ワークショップ
～オブジェを作って空気を感じてみよう」の様子

それから物語を生み出すような造形を作り出し、非常に興味深いものであった。

環境を知覚化、視覚化する装置について、石松は風鈴や雪形を挙げ、それらに共感を覚えている。数値に頼ることのない、アナログな現れは、客観的なものではなく、それをどう感じるかは主観的でありまた普遍的なものでない。しかし、このことこそ環境について、実感のこもったとらえ方だと言えよう。

石松の造形ワークショップでは、《環境感知器》をモチーフとし、子どもたちはそれを元に環境を表現することを行っているが、どんな形にしようかと考え、手を動かして制作することによって、環境感知器が微妙なバランスにある、その構造を知り、さらにできあがったものへの愛着が生まれると考えられる。さらに、実際にそれが動くことは、自分や周囲の人々の存在によるものであることから、環境について自分を含めた事柄であると認識することができると言えよう。《環境感知器》は石松の関心の元ともなっているやじろべえなどからさらに発展し、造形表現として、また美的体験を享受するものとして存在している。そして、その造形ワークショップは、直接的に環境を捉えるものではなく、制作する過程はもちろん、できあがったものの動く様子を愉しむことで、環境に対する新たな視点を持つようになるものだと言えよう。

IV．終わりに

環境とは、身近なものから地球全体まで、非常に幅広く捉えられる問題である。それを最初に挙げたような、「総合的な学習の時間」などを通して、子供たちが身近に感じ、取り組んでいけるかということは難しい問題である。その一方で、造形作家たちも同じ環境に対して関心を抱き、それぞれのアプローチを行っている。藤や石松の制作において、環境とは表現そのものである。藤は、VPCのモチーフとしているビニール、プラスチックやペットボトルなどを、ゴミとして集まったものではなく、“現代社会を象徴する重要な素材”と捉えなおし、様々な人々と造形ワークショップを行っている。また、石松はこれまでも述べてきたように、数値データなどではない、身近な環境の変化を知覚化、視覚化するための装置を造形表現として行っている。これらは、造形行為そのものだけではなく、現場に関わることで、さらに発展することでより環境との関わりを深めていくことだと考えられる。彼らの制作、造形ワークショップが、リサイクルや環境問題などと関わりはあるものの、異なる位置づけが可能であるのは、作家の造形性によって制作行為にズレが生じているからであり、新たな表現の可能性を追求しているからだと考えられる。また、彼らの活動は、環境への意識をワークショップや作品発表を通して、作家の内面だけではなく、他者と共有し、発展しており、単なる造形活動にとどまらないものだと言えよう。

私が今回、取り上げた造形ワークショップでは、環境に対してなんらかの解決を求めようとするものではなく、表現の一つであるということは何度も述べてきた。しかし、このような造形ワークショップは、造形に主眼を置くだけでなく、環境という非常にコンセンサス的な問題を取り上げているという点で、日常生活から離れることなく、より人々が関わりやすいものだと言えよう。そう考えると、藤のワークショップも石松のワークショップにも環境教育との新たな関わりを見いだすことはできないだろうか。彼らの制作やワークショップを通して、環境について子どもたちに何かを教えることや子どもたちが教わるという関係ではなく、発展性のあるプログラムに主体的に取り組むということ、また、表現を考えることを通して環境に対する意識を変革していくということが考えられる。造形ワークショップという形態は、環境教育に必要な主体的に関わり、また行動することを導くものであると言えよう。さらに、VPCや石松のプロジェクトが、多くの人々が関わりやすい仕組みを持ち、それらがまちづくりの現場での展開を見せていることから、今後、そういった造形ワークショップが、小学校などにおける環境教育だけでなく、様々な側面からのアプローチによって行われていくと考えられる。

参考文献

- 加藤秀俊編『日本の環境教育』（河合出版、1991年）
- 金沢21世紀美術館建設事務局編『2001年度金沢21世紀美術館活動記録集』
- 環境教育辞典編集委員会『新版環境教育辞典』（旬報社、1999年）
- ジョン・パーズレイ、三宅徹訳『アースワークの地平—環境芸術から都市の空間まで』（鹿島出版会、1993年）
- 東京学芸大学野外教育実習施設編『環境教育辞典』（東京堂出版、1992年）
- 中野民夫『ワークショップ—新しい学びと創造の場』岩波新書710（岩波書店、2001年）
- 日本児童教育振興財団編『環境教育実践マニュアル vol.1「全国小学校・中学校環境教育賞」優秀事例報告』（小学館、1995年）

（提出期日 平成15年12月10日）